

支流との合流部での氾濫を防ぐ

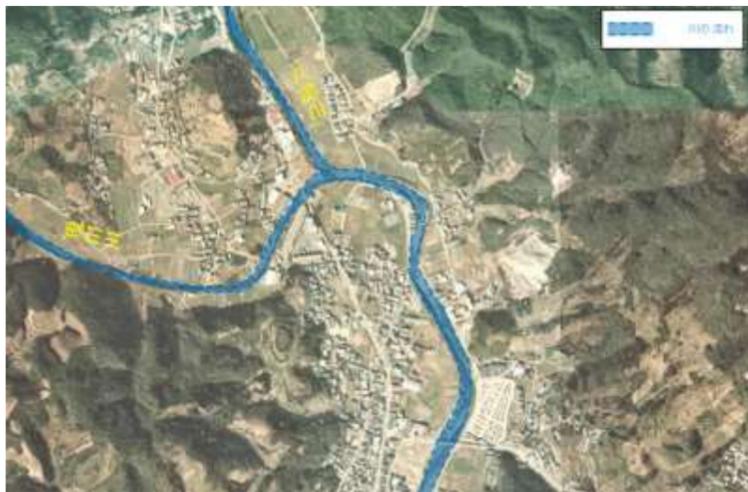
八郎川についても、大水害後、中尾ダムの建設と河川の改修による治水対策が行われています。

八郎川の河道形状の変化

八郎川及び現川における被害を受け、水害後の河川の改修にあたっては、八郎川と現川合流点付近にあった川の屈曲部を直線に付け替えています。

(水害前 (昭和55年頃) の八郎川と現川)

(水害後 (平成19年頃) の八郎川と現川)



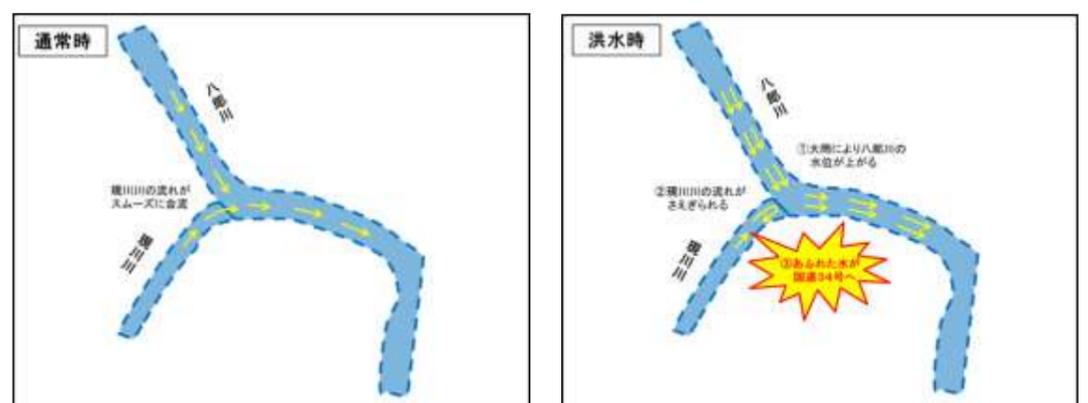
(八郎川、現川合流点付近の航空写真と地図)

【出典：国土地理院】

近年水害事例との類似点 (バックウォーター現象)

平成30年7月豪雨において、堤防決壊による甚大な浸水被害が発生した岡山県倉敷市真備地区においても本流の高梁川に対して合流する支流の小田川の合流点の形状が大きく湾曲し、川幅も狭い箇所であったため水がせき止められる形となる「バックウォーター現象」が起きたことが堤防決壊の原因の可能性が指摘されています。

同様のことが、長崎大水害時の八郎川と現川でも言えるかもしれません。



(八郎川と現川との合流点の河川形状の模式図)